仏教・寺院２

長岡京の川原寺

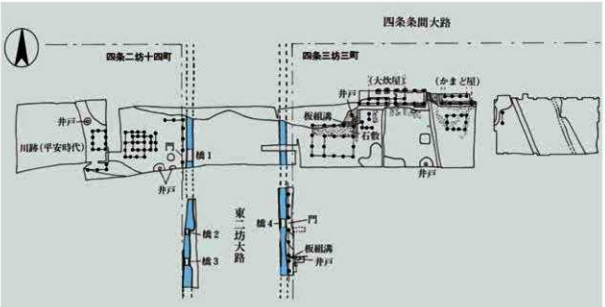
http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

川原寺の井戸跡　方形の井戸のまわりには礎が敷きつめられ、板組の溝によって区画される。

長岡京に関係すると思われる寺は七つあることが、『続日本紀』延暦九年（790）の記事でわかる。しかしこの七寺についてはいまだ明らかとなっていない。文献史料から知ることのできる寺院名としては、『類聚国史』大同五年（810）の記事に、川原寺と長岡寺の二つがみえるのみである。長岡京内で現在知られている寺院は５遺跡あるが、このうち文献史料に記載された寺院名と実際に残る地名とが一致するのは川原寺のみである。他の寺院が当時どのような名前で呼ばれていたのか、また長岡寺（乙訓寺か）がどの寺を指しているのかなど問題は数多く残されている。川原寺を除く他の４遺跡はいずれも京遷営以前の飛鳥・奈良時代から存続していたことが出土した瓦や土器などからわかり、長岡京遷営とともに京内に組み込まれたものと考えられている。

川原寺は、伏見区羽束師菱川町に残る小字名「東川原寺・西川原寺・下川原寺」を中心とした地域にあったと推定され、長岡京の左京四条三坊三・四・五・六町付近にあたる。これは小字名が手掛かりとなり、早くから寺院跡として知られていた遺跡である。川原寺の名が文献に見える例は４例あり、いずれも平安京遷都後の記事であるが、それだけ川原寺の持つ意味が大きかったことがうかがえる。記事には大同二年（807）伊予親王と母藤原吉子が幽閉され自殺したこと、大同五年七月十三日に川原・長岡両寺で嵯峨天皇病気平癒のために読経、同じ月の二十九日には崇道天皇のために川原寺で写経、弘仁七年（816）九月五日に川原寺で読経したとある。川原寺が９世紀まで存続していたこと、さらにいずれの記事も天皇に直接関係する事柄であることがわかる。この寺を大和の川原寺とする解釈が一部の書物に見られるが、長岡京の川原寺とするほうが適切であろう。

推定地近辺の発掘調査の事例には５例あるが、いまだ寺の中心伽藍となるべき瓦葺の建物跡などの発見例はなく、寺域の大きさや配置などはわかっていない。現在ま



遺構配置図(1:1000)　四条三坊三町には大衆院関係とみられる建物が並ぶ。

長岡京の寺院跡位置図

雨屋と思われる建物跡
点々と焼土が並ぶ。

でに出土した瓦数も少なく、寺院には瓦という通説には合わないが、「井」・「旨」銘軒瓦などの長岡京期の瓦が数点みられる。また、掘立柱建物の内外に石敷を広い範囲に施したり、建物内に竈を並べて使用したと思われる痕跡、板組の溝、大路に開く門と橋跡などが検出され、これらはすべて通常の邸宅にはみられない遺構である。遺構は計画的に配置され、また占地関係から寺域の北西部にあたることから、寺の炊事などを行なう竈屋などが並ぶ、大衆院関連の遺構群と推定される。出土した遺物の中には、土器に「王」・「東」・「大」・「本」などの墨書したものが多くみられ、また木簡の出土数が目立つこと、木香や漆紙文書など特異なものがみられることからも、この区域に寺跡が想定できる状況にある。

これらの検出した遺構・遺物には長岡京期を遡るものがみられないことから、川原寺が長岡京以前から存在した寺ではなく、京の造営に合わせて新たに造られたものと思われる。

桓武天皇は平城京の仏教勢力を排除し長岡京を造営するが、次の平安京に見るように東寺・西寺を鎮護国家の国寺として造営することからもわかるように、長岡京にも同様な意志を試みたのではないだろうか。このことから、先にあげた平安京遷都後の川原・長岡の二寺の扱いが理解され、平安京東西両寺の造営の進捗に合わせその役割を終えたものと考えたい。

さらにこの東西二寺の構想は、藤原京の大官大寺（東）と本薬師寺（西）、平城京の大安寺（東）と薬師寺（西）との関係であり、都の造営と共に引き継がれてきた事柄と言える。長岡京の川原寺（東）と長岡寺（西）も、こうした関係の中に位置づけされる寺院とみられる。平安京では位置を整理し、朱雀大路を挟んで対称に掘えたのである。

（長宗繁一）